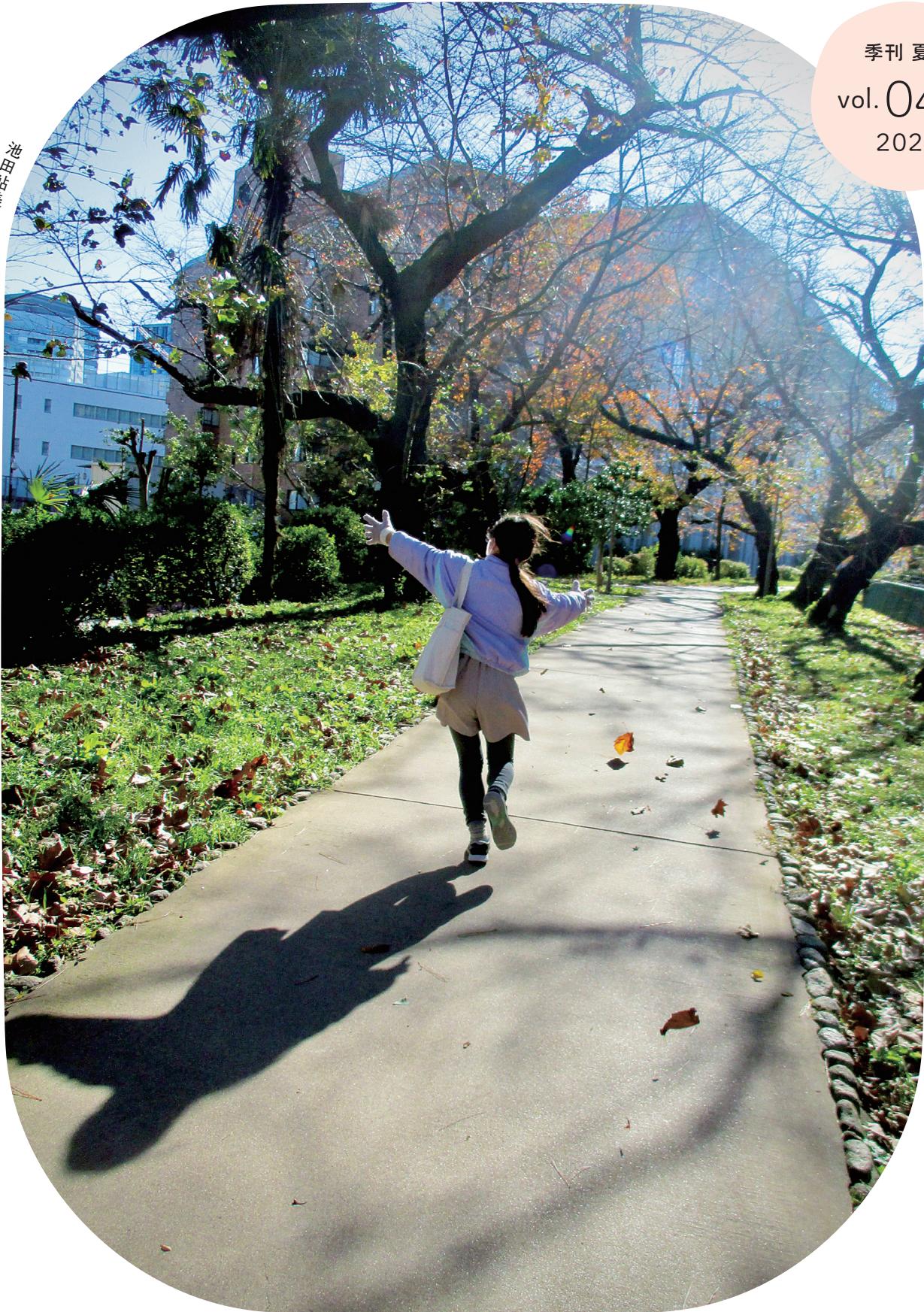


ヨコハマアートサイト



季刊 夏号

vol. 044
2025

赤田 錦糸《ヨコハマアートサイト》©2025 STAND Still All Rights Reserved

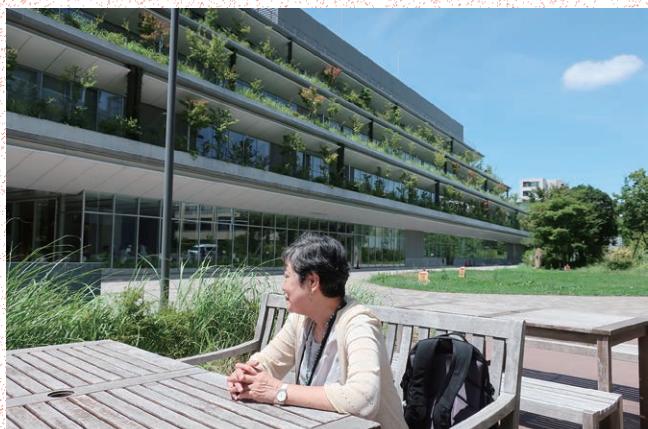
〔特集〕ひとりの記録が、誰かに届くと

ひとりの記録が、誰かに届くとき

個々人の何気ない瞬間が記録されている写真や日記には、誰かに見せることのなかった思いや願いがたしかに存在しています。その存在に寄り添って社会に開いていく活動は、作者や筆者にとって、さらには鑑賞者や読者である“私たち”が生きるための居場所へつながり、地域の文化が広がっていくかもしれません。



STAND Still 写真展の設営風景。
出品数は一人2点。写真を選ぶプロセスも参加者にとって自己決定の経験となり、尊厳の回復につながる。



小山さんノート 『小山さんノート』(エトセトラブックス)を編集した、ベンチに座る佐光正子さん。



本屋「電燈」 店の一角にある図書室には、ただ本をめくって帰る人もいれば、雨宿りをしながら買った本のページをめくる人の姿も。時間の余白が、その場をより開かれたものにしている。



写真に添えた説明文「キャプション」を自ら読み上げる2024年朗読会の様子。舞台には7人のサバイバーと、パフォーミングアーツDAYAのパフォーマーが立ち、それぞれの思いを表現した。

STAND Still

立ち止まって、見つめる今の私

道端の草花、風景の中にいる小さな生き物たち、日常生活のワンシーン。命あるものが、それぞれの居場所に今、立っている。そんな写真の数々が、STAND Stillの写真展に展示されていた。STAND Stillはさまざまな背景や被害体験を持つ性暴力サバイバーたちが中心となって立ち上げた団体だ。横浜を本拠地として全国各地で写真展を開催し、社会における性暴力サバイバーへの理解を深め、問題解決の糸口となることを目指している。その活動の核は、公に声をあげられない・声をあげない選択をしたサバイバーが写真を通じた表現をすることだ。写真展は、ワークショップを通した写真作品の制作と、区役所や男女共同参画センター、商業施設の一角など、公的に開かれた場所で開催される。昨年度には写真集を出版し、団体にとって大きな一歩となった。さらにギャラリートークや、写真作品と

キャプション（作者の思い・言葉）をプロによる演出や音楽とともに表現する朗読会を開催し、その活動を社会に届けることに取り組んできた。

写真の中の思いを声にする

医療や福祉の支援プログラムとは異なる“創作活動の場”であることを活かして、参加者が主体的にプロジェクトに関わるような活動をしている。その中で大切にしてきたのは、被害当事者のエンパワメント。それはもともとその人の中にある力や可能性を引き出して、自分らしく生きていく力を取り戻すことだ。「性暴力に遭う体験は、自己決定や自己選択の権利、さらには人間としての尊厳を奪われるということです。それを一度奪われた人たちが、再び表現できるようになることはすごく大事なことです」と代表のリーナさんは語る。参加者はこの活動を通して変化していった。例えば、朗読会では当

心に秘めた個人の思いを、表現を通して社会に開く

自分たちの今を写真に託し、

さまざまな背景や被害体験を持つ性暴力サバイバーたちが



初、すべてのキャプションをプロのパフォーマーが読む想定をしていたが、「自分の声で読んでみたい」という声がワークショップを通して参加者からあがり、当事者自身の声で写真の中にある思いを伝えることができた。

ゆっくりと歩き出す

写真を撮影し、そのキャプションを書いて展示するというプロセスは自分と対話したり、自分を見つめ直す時間を生むという。「社会への提言というよりは、個人として日々を過ごす中での思いや、長く抱えてきた思いを静かに

伝える。この活動はそんなことが叶う場所のような気がします」とリーナさん。写真展示から伝わってくるのは、未来への希望や回復という言葉だけでは表わしきれないようなそれぞれの思いだ。痛みやもろさも携えて、生きることを決めたその強さが潜んでいる。安心で安全な場を保ちながら、STAND Stillの活動は当事者だけではなく、AIDSや人権、ジェンダーなどといった近いテーマに取り組んでいる人々との交流も生まれている。彼女たちの思いが今ゆっくりと、静かな波紋のように広がっていく。



ワークショップ参加者が展示作品に込められた思いを語り、観客も温かく見守る穏やかな時間となったギャラリートークの様子。



ワークショップを通して撮影された写真



STAND Still

<https://standstill.jimdofree.com/>



当事者のほか、支援に関心を寄せる人々が参加したトークイベント「無理しない当事者活動とその支援 言語化しにくい・しない思いに寄り添う支援を考える」の様子(なか区民活動センター、2025年8月24日)

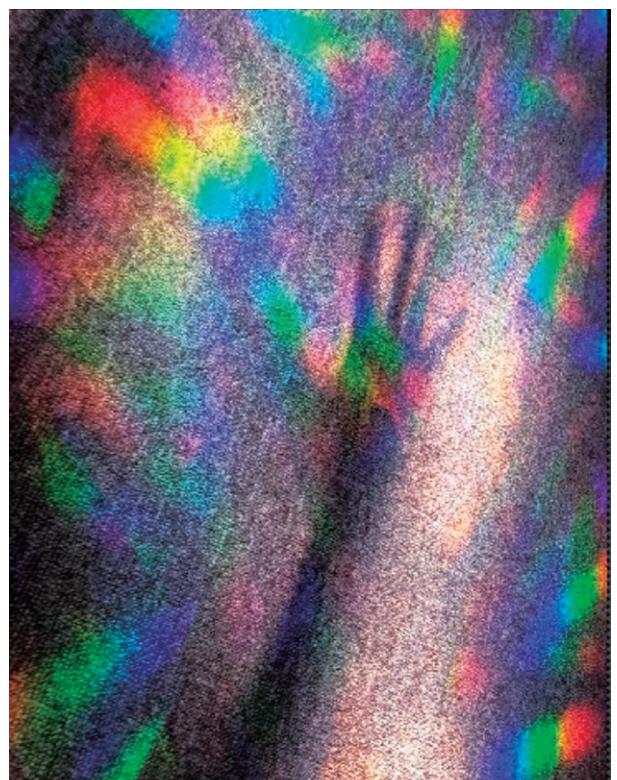
社会への提言というより、

個人として日々を過ごす中での思いや、

長く抱えてきた思いを静かに伝える

STAND Stillの活動はそんなことが叶う場所。
代表のリーナさんは、そう話す

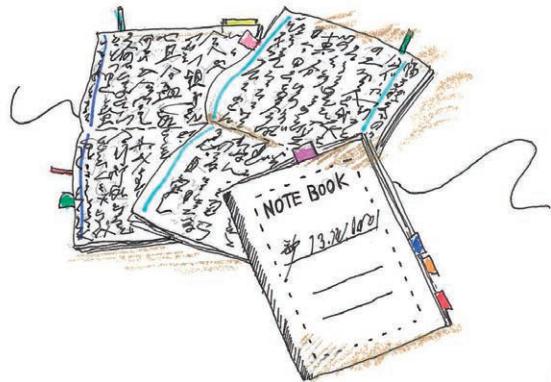
S.Nakajima《暗さの中にも現れる虹色の光》©2025 STAND Still All Rights Reserved



小山さんノート

| 感じたことを伝えあった先の書籍化

「見えないまま、ないものにされるのは、ほっとけない」。佐光正子さんはそう話し始めた。佐光さんはDV被害の当事者としての経験を契機に、1990年代から相談活動に携わってきた。横浜での相談員を経験した彼女は、現在は女性の居場所づくりに取り組んでいる。そんな佐光さんは、小山さんと呼ばれたホームレスの女性が2013年に亡くなるまで、公園で暮らしながら書き続けた約80冊のノート（日記）の書き起こしと編集にかかわった。達筆で癖のある筆跡を仲間とともに読み解く作業は8年に及び、やがて書籍『小山さんノート』（エトセトラブックス、2023年）として結実した。書籍化の過程で行われたワークショップでは、野宿経験のある人やアーティスト、留学生らが集まり、それぞれの視点を持ち寄った。ノートを声に出して読み合う読書会や、小山さんが訪れた場所を巡るフィールドワークも重ねた。「それは一人ひとりが大事にされて、話し合うことのできる場所でした。小山さんのノートを通して、みんなで自分の感じたことを伝え



話し合うことのできる場所から生まれた『小山さんノート』

一人ひとりが大事にされて、

個人の記録を通して

社会の痛みと願いを映し出す

あった先に書籍化があったんです」と

佐光さんは話す。

| 誰かの記憶を社会に開く

書籍化されたノートの中には、非正規労働の問題や、資本主義社会の不和、マイノリティとして生きることについてなど、社会で生きる人々のさまざまな痛みと願いが込められた。小山さんは暴力を受けた時に、自分の意思をノートに綴り、言葉にした。佐光さんは、そんな彼女の強さに心打たれたという。「ノートを編集する際は、そこに描かれた暴力の場面をたんなる悲惨な出来事としてではなく、弱い立場にある人に力を振るう社会構造の問題として読み解くことを意識しました。その上で、

小山さんがどんな状況でもノートへの表現を続けて、自分を失わずに生き抜いた姿を伝えたい」と語った。出版後も反響は大きく、読者は性別や立場を越えて小山さんと自分を重ねており、まるで小山さんとの対話が生まれているかのようだという。横浜で行われていることぶき「てがみ」プロジェクトでは、『小山さんノート』をめぐるワークショップを経て制作した演劇を12月に上演する。ある個人が生きた記憶を社会に開いたとき、それを目にした人が自らの経験と重ね合わせ、つながっていく場が生まれていく。



『小山さんノート』の出版に関わった佐光正子さん。佐光さんは現在、コミュニティ・ネットワーク・ウェーブの理事長を務める



寿町のことぶき共同診療所精神科デイケアの利用者や支援者を中心に、演劇作品を創作・上演の活動をすることぶき「てがみ」プロジェクト。個人の言葉や記憶を軸に対話を重ねて創作を行っている



ガラス越しに本や人の気配がのぞく本屋「電燈」の外観。

本屋「電燈」

まちに開いて、届けたい

神奈川区・六角橋商店街を抜けた住宅街に、ひっそりと佇む本屋「電燈」がある。ガラス張りの店の外からは、テーブルの上のランプが温かく灯っているのが見える。店主の吉成さんがここを開いたのは2024年2月、住居兼店舗として始まった。店の一角には、ソファを置いた図書室もあり、誰でもゆったりと本を開ける空間がある。吉成さんの自室の蔵書を置く場所が必要になつたことから始まった試みだが、「買わなきゃ」と思わず本と会える場所にしたいという思いがあるという。店内では不定期に参加者が本を持ち寄って語り合う会や、作家との対話イベント、読書会などをしている。小さな場だからこそ、参加者それぞれの声の響き合いを尊重し、丁寧に人と人のつながりを育てている。商店街のイベントへの参加や、男女共同参画センター「本がひらく、ともに暮らす世界の扉」展への選書協力にも取り組んだ。吉成さんは「イベントにはこの町で本屋を

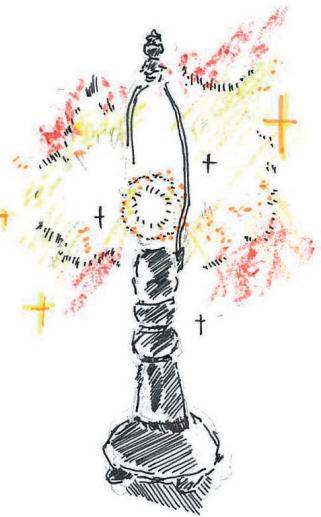


「電燈」では自分のアイデアや作品、写真、文章などを小規模・自主制作でまとめたZINEやフリーペーパーも取り扱っている。

営む中で生まれた人とのつながりをきっかけに参加しました。これからまちに住んでいる人と一緒に、地域に開いていけたら」と話した。

社会の言葉に寄り添う

店内には、大手書店では見かけないような、個人の日常について書かれた日記やエッセイや、ジェンダーなどの多様な生き方、特定の地域での生活や文化についての書籍が多い。吉成さんは「ここにある本は、“社会にあったらいいな”と思う本です。誰かが痛みを抱えずに、みんながつながりながら生きていけるヒントになつたら」と話した。選書は、自身の「知らない誰かの



六角橋商店街を抜けた住宅街に佇む本屋「電燈」

対話によって育まれる場…

個人の声に光を当てた選書、

本を通して人に寄り添い、社会をつなぐ

ことや社会、歴史のことをもっと知りたい、寄り添いたい」という気持ちから始まるという。「社会にはさまざまな生き方がある。自分とは違う生き方をする人が書いた本を読むことや、そういう人が書いた本を本屋の本棚に置いて手に取ってもらうことは、小さいけれど、確かなアクションになると思うんです」。「電燈」に置かれる一冊の本は作者の思いであり、同時に吉成さんの願いでもある。本を通して人と人をつなぐ本屋は、今日もこのまちで静かに灯りをともしている。

電燈

神奈川県横浜市神奈川区六角橋2-13-6 N4
<https://dento.stores.jp/>

ヨコハマアートサイト2025 キックオフ・ミーティング

発表 ヨコハマアートサイト2025参加団体のみなさん
進行 小川智紀(ヨコハマアートサイト事務局)
日時 2025年6月28日(土)
場所 横浜市市民協働推進センター スペースA・B

「横浜市地域文化事業・ヨコハマアートサイトは、地域課題の解決にアプローチするため、文化芸術の持つ創造性を「コミュニティやまちの活性化と結びつける活動」や「横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動」を広く公募し、支援する事業です。2026年1月31日まで、横浜の各地域でアートイベントが行われます。今年度の活動に、ぜひご注目ください。



「ヨコハマアートサイト2025」キックオフ・ミーティングの様子

今年度のヨコハマアートサイトは応募件数が56件で、その中から29件の事業の参加が決定し、活動が進行しています。

横浜市内の地域の記憶を発信する取り組みでは、市民の思い出を詩作や朗読のワークショップを通して公共空間へ展示する「NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ」、横浜のジャズ文化の歴史や魅力を若い世代に継承するイベントを実施する「ミュージッククロニクルYokohama」などの団体が活動します。

障害とアートの新たな関係を探る取り組みでは、福祉事業所の利用者による作品のあり方を職員やアーティストとともに問い合わせ、商店街を始めとした地域に開く可能性を探る「こくらやま実行委員会」、障害のある人が演奏者として参加できる音楽イベントの開催と、障害の有無にかかわらず、音楽を楽しめるライブハウスでの合理的配慮のあり方を考える「多様性創造研究所」、発達の特性や特別な配慮の必要があるスペシャルニーズキッズを主な対象に香りのワークショップを行い、音楽や視覚芸術との関わりを模索する展示を行う「一般社団法人JOAA」などの団体が活動します。

また、楽器づくり体験や音楽鑑賞体験を届け、障

害の有無や年代にかかわらない地域住民による共生社会の形成を目指す「こうなん・やさしいつながりプロジェクト実行委員会」が地域社会の課題にアプローチする取り組みを行いました。子どもから大人まで幅広い年代を対象に、日用品でつくった楽器とオーケストラが共演する演奏会を行う「ルロット・オーケストラ」、竹楽器の演奏やワークショップ、竹の食材や書籍販売など竹を中心としたフェスティバルを開催し、竹林問題を考えるきっかけをつくる「スパイスアップ」などの団体は地域でのコンサートを開催します。

そして、アジア文化を起点に生活文化に触れる取り組みとして、「ジュクン・ミュージック」が東南アジアの人々の生活とアートを体験できる影絵パフォーマンスや作品展示、料理体験などを開催しました。アジアの若手作家のコレクティブが地域の銭湯を会場に展覧会や映像上映会を行い、横浜の銭湯文化とアートをつなぐ「Bubba Bubble」も、地域を活性化する活動を展開します。

今年も幅広いアート活動が地域で展開されます。ご紹介したほかにもさまざまな団体が各地でイベントを開催するので、ぜひ一度訪れてみてください。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、
今日も横浜市内のあっちこっちへうろうろしています

6月8日 日曜日



地域の子育て支援を続けるNPO法人びーのびー。設立25周年を祝う会は堅苦しい式典ではなく、港北区・カーボン山でのフェスティバルとして実施。音楽ステージの横では、団扇づくり、ジャグリング体験で大騒ぎする子どもたちの姿が。現役の子育て世代から市民活動のレジェンドまでが集う記念日になった。

7月5日 土曜日



金沢区のアサバアートスクエアでhoshifuneによる影絵公演《Me》。炎を利用した幻想的なステージ上ではバリの伝統音楽であるガムランが演奏されたほか、日本の伝統芸能も織り交ぜながら物語が繰り広げられた。自然とアートを愛する人々にとってのコミュニティの結びつきを深める機会にもなった。

8月4日 月曜日



「夏休みみだよ!音楽を楽しもう♪」が、港南台バーズ1F ドゥファッショングラザにて開催。写真は、こうなんやさしいつながりプロジェクト委員会による手づくり楽器工作のブースの様子。人形劇やコラスの上演で盛り上がる会場の片隅で、熱心に工作に取り組む子どもたちの姿があった。

8月24日 日曜日



関内の泰生ポーチフロントで、NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボによる詩作ワークショップ。住まいの記憶、かつてあった施設について、まちで見かけた気になる人のことなど、横浜市内での身近な出来事・思い出を共有し、生活の中から詩が立ち上がるプロセスに立ち会った。

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題に対して文化芸術の持つ創造性でアプローチし、地域コミュニティに寄与する取組を支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局(認定NPO法人STスポット横浜、横浜市にぎわいスポーツ文化局)

〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビルB1F(認定NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部 内)

TEL: 045-325-0410 FAX: 045-325-0414 MAIL: office@y-artsite.org WEB: <https://y-artsite.org>

SNS: https://twitter.com/Y_Artsite <https://www.facebook.com/yokohama.artsite>

季刊ヨコハマアートサイト vol.044

発行: ヨコハマアートサイト事務局

編集: 認定NPO法人 STスポット横浜 編集協力: 大谷薫子 取材・テキスト: 小川智紀、松橋萌、田中真実 イラスト: 松橋萌

デザイン: 岡部正裕 印刷・製本: 共進印刷株式会社 発行日: 2025年9月30日

季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。